

激動の経営

光源から熱源に

冬になると恋しくなる、こたつ。その熱源を手がけているのが、メトロ電気工業（愛知県安城市）だ。

「こたつの需要がこんなに長引くとは思っていなかった」と社長

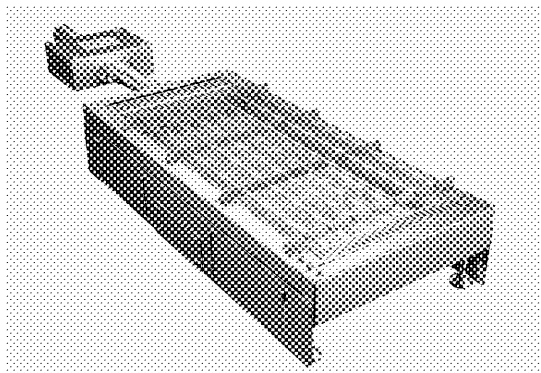
メトロ電気工業

①

の川合誠治は笑う。時代に合わせた迅速な決断で、想定外であったも良い経営をしてきたからその笑顔。ひらめきを大事にする川合の執務室には、トーマス・エジソンの肖像が飾ってある。

1913年に白熱電球の製造販売から始まった同社。発光ダイオード（LED）の台頭で光源としてのランプからは手を引き、2019年には106年続けた白熱電球の生産を終えた。熱源としてのランプ製造へ転換し、開発したのが赤外線カーボン

こたつ用ヒーター製造



「ボンランプヒーター」「オレンジヒート」。2000度C程度まで高めることができ、自動車部品の金型加熱工程でも使用する。

エンジンニア育成

赤外線カーボンランプ

「ボンランプヒーター」「オレンジヒート」を使った加熱機械も製造する。原点は81年に発売した「こたつ用ヒーターユニット」。部品納入だけでなく、よかった家電メーカーから、電気に疎い家具メーカーへの顧客の移行に伴い開発した。ユニットにすることで付加価値が生じて顧客がらしたら便

自動車部品用金型の加熱工程で使用する「赤外線ヒーター」式ハイパワー金型加熱器

加熱機械、内製化を推進

利だ。オレンジヒートでは加熱機械を開発。内製化を進め、今では制御盤まで自社で手がける。19年には板金加工設備も導入し、設計から製造までワンストップだ。

課題もある。今までの部品製造の営業では戦えないのだ。セールスエンジニアが提案し、顧客と共に製品を作っていく。エンジンニアリング企業への移行のためエンジンニアを育てる必要がある。

そこで22年4月に営業体制を一新した。全国に5拠点あった営業所は東京を残して順次閉鎖し、本社でエンジンニアの育成に力を入れ

始める。営業部は廃止し、特別販売課を意味する「特販課」とした。

「管理ポストが多いと連絡に時間がかかると。決断は早いに越したことはない」と、あえて「部」ではなく「課」にしたという川合。「自ら決断できるように成長してほしい」という社員へのメッセージともとれる。

「脱炭素」追い風

22年度上期の売り上げの内訳は、こたつ用ヒーターの「暖房機器事業」が72%、オレンジヒーターの「ヒーター管事業」が15%、産業用加熱機の「加熱機械

器具事業」が8%だった。依然、こたつ用途が多くを占める。脱炭素化の流れは、ガスの代替として、これらのヒーター商品を提案しようとしている同社にとって追い風。

川合は「将来的には、各事業で30%にしたい」と追い風に乗り、こたつ偏重からの脱却という新たな挑戦を続ける。

(敬称略)

▽所在地：愛知県安城市横山町寺田11の1
▽代表者：川合誠治氏
▽創業：1913年（大正2）5月
▽資本金：6000万円
▽従業員：86人
▽売上高：約30億円（22年3月期）